

# 「父よ、父たちよ」

著者：上沼 昌雄

- ・対象：青年以上の男性のみに
- ・方法：グループでの読書会にて
- ・回数：1章～4章を各章1回で

## 1. この本を読むにあたって

**著者：**上沼 昌雄

聖書神学舎やシカゴ・ルーテル神学校などを卒業し、神学博士号。  
現在、カリフォルニアに在住。

「聖書と神学のミニストリー」代表として、プロミス・キーパーズの  
理念に基づいた男性集会や夫婦セミナーなどの講師として活躍中。

**出版社：**いのちのことば社

**出版年：**2010年3月

### 本の要点：

この本は、著者のセミナー等の経験を通して、主に男性の視点から、男性の霊的な深まりを目的として書かれています。

以前紹介した同著者の「夫たちよ、妻の話を聞こう」も同じ経緯で出版されており、出版社のホームページでは以下のように紹介しています。「父親」一息子たちは、その響きに懐かしさを感じつつも、苦い思いを抱くだろう。男性の心の闇としての「父親」を、パウロの「父たちよ。……子どもをおこらせてはいけません」との呼びかけを手がかりに、正面から見つめ直す。父であり、息子である男性のための一冊」。

### 本の内容：

この本は、次の4つの章からなっています。

#### ①第1章 面倒な存在としての父

エペソ書6章4節の御言葉を手がかりとして。父親と息子という教会でなかなか語られることのない、けれども心の深みに存在する痛みを目を留めていきます。

#### ②第2章 それでも、なくてはならない存在

マタイ6章に記されている「隠れた所におられる父なる神」という視点か

ら、私たちに与えられている『父親という存在』をより掘り下げて見ていきます。

### ③第3章 アバ、父

「子とされる」という教えが、単なる教理ではなく、実際的な救いであることを教えられます。

### ④第4章 これは、わたしの愛する子

全体のまとめとなっています。これまでの章で、いかに「父親と息子」という関係が複雑であればあるほど、その存在はいかに大切に、切り離せないものであるかを実感します。この章では、御言葉の教えからもう一步踏み出して、実際の父親に目を向けていくことを励ましてくれます。

各章は聖書の御言葉を手がかりに父親と息子との関係に目を留めていきますが、決して知識のためや学びのための内容とはなっていません。どこまでも本を読む私たちの実際の父親の姿を思い浮かべつつ、複雑に絡み合っている関係を解きほぐしていってくれます。

そのためには一人で読むのではなく、「グループで分かち合いながら」読むことをお勧めします。できれば、まず「男性たちだけのグループ」で分かち合われることをお勧めします。

## 2. 確認コーナー

<本書を用いて、分かち合う時の注意点>

- ①必ず、事前に読んでから集まりましょう。
- ②互いに謙遜に、互いの言葉に耳を傾けましょう。
- ③分かち合うことを目的とし、出てきた意見を批判したり、答えを強要したりしないようにしましょう。御言葉を手がかりにしていますが、「知識を蓄える」が中心ではありません。
- ④分かち合ったことはその場だけに留めることにし、他の誰かにそのことを話したり、知らせたりしないようにしましょう。
- ⑤特別に問題を感じる時はそのことのために神に良く祈り、個人的に牧師に相談しましょう。